

歩道橋の魔術師

呉明益・天野健太郎 訳

内容理解

この文章で筆者は、歩道橋で商売する、「ぼく」と自称魔術師との、マジックを通しての交流を描いている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

◇ 商売上手

歩道橋で靴ひもと中敷きを売るぼくは、十歳までは、人生を生き抜くための最初の¹ である、子供の笑顔を使い、なかなか商売がうまくいったらしい。

◇ 歩道橋デビュー

² 中華商場の歩道橋の上で、最初の日、欄干に結んだ靴ひもが風に揺れる。中敷きを左右対称に並べる。ここで³ するのが楽しみになってきた。

◇ 出会い

真向かいで、地面にチョークで縁を描き、トランプや鉄のリングを並べる男は、「魔術師だ」と宣言した。「このマジックは全部⁴ なんだ。」と言う。

◇ ダイスマジック

魔術師のダイスのマジック。魔術師の目はマジックのとき、キラリと光つた。誘惑に勝てず、中敷の売り上げで「不思議なダイス」を買う。練習のかいなく、兄貴に見破られ、ダイスを召し上げられる。

◇ ゴミ

高価なマジックの道具を次々と買い、ずいぶん経って、マジックは神秘的でもなんでもなく、ただの⁵ 、どれも同じからくりであることにやつと気づいた。「店の金であんなゴミばかり買いやがつて」母さんは腹を立て、ビンタをくれた。

◇ 黒い小人

魔術師は黒い紙の小人を地面に置き、踊らせる。商品はまた売れ始める。

◇ 歩道橋のスター

⁶ にお辞儀をする黒い小人に、ぼくは夢中になった。

店番 魔術師と親しくなり、バターパイをお裾分けする。なにか食べているとき、魔術師の目はくるっと、左右異なる方向を見ることがあった。まるで世界の動向をひとつでも見逃すまいとしているようだった。

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

そもそも（二三〇・上13）

外見（二三一・下一）

披露（二三二・下8）

朝飯前（二三六・上15）

◇ 小人の死 別の日、土砂降りの雨に濡れ、小人の腕がちぎれる。「小人が死んじゃった！」

ぼくはひきつけを起こすまで泣きじゃくった。ぼくの 6 にぽっかり穴が空いた。

◇ 新しい小人 魔術師は紙から黒い小人を切り出し、踊らせる。「あの黒い小人は死んでないよ

ね？」に、魔術師は二つの目で違う方向を見ながら、「わからない」「人の目が見たものが絶

対とは限らない。」「死ぬまで覚えていることは、 7 8 で見たことじゃないからだよ。」と

言う。ぼくは彼の言うことがわからなかったが、自分が 8 として扱われた気がした。

◇ 嘘 ぼくは、魔術師に黒い小人の秘密を教えてくれとせがむ。「わたしのマジックはどれも

嘘だ。でも、黒いこの小人だけは本当だ」「本当だから 9 10 なんてないんだ。」と

厳しく言った。ぼくは信じない。「子供だからって嘘つくなよ！」と言った。

◇ 小人の秘密 もう商売できなくなるぼくは、魔術師に、小人の秘密を教えないとできる人が

いなくなる、と駆け引きめいて言う。魔術師は笑って、ひとつの目で遠くのほう、もうひ

とつで、ぼくの心のなかを見た。夜八時、商場の屋上。魔術師は、チョウを標本にしてもチョ

ウは自分のものにならないと見抜いて、黒い小人のような本当の 10 が使

えるようになった、それを教えることはできないが、これをあげよう、と言い、自分の

左目を取り出し、手のひらを広げて見せた。……………

主題

この作品で作者はどのようなことを描こうとしたと思われるか、次のことに着目して、百字程度
でまとめてみよう。 〈着目点: 「ぼく」の成長〉

発展

次の中で興味を持った事項について、図書館の
書籍やインターネットなどを使って調べてみよ
う。

・ 中華商場とはどのような場所だったのか。

・ 現在の日本では、路上での販売にはどのようなものがあるか。

・ 歴史上、マジックを見せる人物には、どのような人がいたか。

100